

Summary, 12/6/2023

日時：2023（令和5）年12月6日

「ロマンス語における心態詞」とイタリア語 *mai*

発表者：土肥 篤（東京外国語大学 世界言語社会教育センター講師）

本発表はイタリア語における不変化詞 *mai* について扱った。*mai* は否定平叙文と疑問詞を使った疑問文に現れ、それぞれ異なる解釈と結びつく。本発表では次に挙げる三点を通して、こうした *mai* の特徴について検討した。

本発表はまず、*mai* がどのように研究されてきたかについて概観した。この語はとくに疑問文で話し手の心的態度と強く結びついた解釈に寄与することから、ドイツ語学において心態詞と呼ばれる諸表現との類似性がしばしば指摘され、心態詞研究をロマンス語へ拡張する研究の中に位置づけられている。こうした研究ではロマンス語に心態詞と呼ぶに値する要素が存在するか否かと、それに伴ってドイツ語における心態詞をどのように定義すべきかが主要な論点となってきた。この点について、生成文法の理論的枠組みによる近年のアプローチでは、心態詞を統語的特徴と（語用論的）意味特徴の組み合わせによって定義するものが提唱されている。

不変化詞 *mai* は、こうした生成文法による心態詞へのアプローチでしばしば「イタリア語における心態詞」の典型例として扱われる。本発表では続いて、統語と意味の両面から定義される心態詞について、意味の側面に注目し、*mai* を心態詞と呼び得るかについて明示的に議論するものうち、意見が対立する二つの先行研究（Coniglio 2008, Manzini 2015）がとっている立場について検討した。とくに *mai* が文タイプに応じて（見かけ上）持っている二つの意味の関係に着目すると、同音異義語であるとする分析が *mai* の心態詞としてのステータスを主張する立場に、多義語とする分析が反対する立場につながっている。一方で、どちらの分析も *mai* が持つ意味に関して説得力のある提案をしているとは言えないことを示した。

本発表では最後に、*mai* がいわば単義語であるとする分析を試みた。この分析によれば、*mai* はそもそも二つの意味を持っているのではなく、単一の意味が文タイプに応じて異なる解釈を生み出す。同音異義語としての *mai* を想定することがこの語を心態詞とみなす立場とつながっていることを考えると、単義語と考える立場は心態詞としての *mai* を否定する立場をより強くしたものであると言える。その一方で本発表は、*mai* が心態詞とみなせるか否かに関連して、ロマンス語における心態詞研究が前提としてきた意味に関する定義そのものの見直しを主張した。